
森の噂の極悪ドラゴンと山にトリップした三十路の私とそんな私の家来達

ティシー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

森の噂の極悪ドラゴンと山にトリップした三十路の私とそんな私の家来達

【Nコード】

N1807V

【作者名】

ティシー

【あらすじ】

山にトリップした私はその瞬間に山の女王になった。家来達をふんだんに使用し、快適なトリップ生活を送っていた私だったが、突然山の女王兼ドラゴンの妻となる。

（前書き）

初投稿一周年記念作品です。ちょっと過ぎましたが（笑）

この山にトリップして半年。

未だにこの世界のことをあまり知らない。この山の名すら知らない。私はトリップ山と呼んでるけど、きつとそれは私だけ。

少し離れた所に頂上だけ見える森には、極悪ドラゴンが住んでいると家来が教えてくれたが、海を挟んでいるそこに行くことはないだろう。

私がこの世界に興味を持たない理由は一つ。別に知らずともココで快適な生活が送れているからだ。

そうだ、べべ別に三十路過ぎたからって快適な生活を送れてればいいんだ！ どうせ一生独身なんだあ！

「姐さん！ 今朝はこんなにいいモノが取れましたぜ！」

「ご苦労」

朝食を持ってきた家来に遠い目をしたまま即答すると、前に手を伸ばす。

それに合わせて食べ物が渡されると、それをそのまま口に運ぶ。

「うん、美味しい」

採れたばかりの新鮮な果実は、口の中でとろけると舌に自然と馴染む。

この山はおいしい食材がたくさんある。

トリップ前もそれなりに充実した日々を送っていたが、一つだけ足りないものがあつた。

「ふっ……恋人さ」

「何がです姐さん？」

私の悲しい独り言に、純粋な瞳でツツコミを入れる家来を華麗にスルーする。

とにかく、世間では‘リア充’なる言葉が流行っていたようだが私には程遠かつた。

恋人を抜きにしてもいいと言うならばリア充だったのだが、如何せん世間はそれを許さなかつた。

どんな後輩達が結婚して行くのを尻目に私はどんな年齢だけを重ねて行く。

後輩達の幸せそうな顔を見る度、呪ってやろうかと密かに思っていたことは実家で飼っていた犬のタロー（雑種犬）との秘密だ。

『ええ〜？ 佐藤さん（私の名字）って結婚してなかつたんですかあ？』

とわざとらしく驚いた顔をして尋ねてくる後輩を殴ってやろうかと思つたのも雑種犬のタロー（今はミックス犬と言つらしい）との秘密だ。

『佐藤さんって綺麗だしい若く見えますよねえ。三十歳だなんて信じられなあい！ あ、そういえば佐藤さんて〜なんで結婚しないんですかあ？？』

なんて聞かれた日にゃ殺意すら覚えたが、それもミックス犬のタ

ロー（呼び方を変更する理由はどこにあったんだろうか）との秘密だ。

まあ最終的には私の……

『くすつ。若いアナタにはまだ分らないと思うわ』

という意味有り気だが全く無い負け犬の遠吠えで終わった。

敗北感に溢れたその夜、実家に帰ってタローに愚痴ったのは言うまでもない。

「いいのよ！ 恋人なんていなくなたって立派に生きていけるんだから！」

「姐さん、手……」

握っていた果物がグシャツと音を立てる。

「あら、失礼」

ニコつと笑うと、家来も引きつった笑顔を浮かべた。

今もし元の世界に帰ったら、きっと会社の皆は驚くだろう。なにがって、私の肌のピカピカさに。なんてったってココは山。

空気は澄んでいて、ぶつちやけやることないから規則正しい生活に、毎日家来のマツサージで肌は絶好調。

さらに自由に叫んだり、やつあたりしたり、言う事はすべてこなす家来がいればストレスも溜まらない。

「姐さん、そろそろ朝の散歩に行きますか？」

「そうねえ」

朝の日課にしている散歩。と言っても家来に乗って山を周るのだ

けど。

「では、皆を呼びます」

その言葉に無言の肯定を示した私を見て、家来は空に向かって高らかに吼える。

「ルオオオオオオオオ」

すると少しの間を置いて、いたる所から返事が返ってくる。

「「ウオオオオオオオオン」」

そしてあつという間に集まった色んな種の家来達。数は数百匹。その筆頭であるジロー（私が命名）はオオカミに似ているがオオカミより数倍大きいサイズの獣だ。

名前の由来は言わずとも分かっていたきたい。

似ていると言ってもジローの頭には角があり、さらにサイズの変更と二足歩行が出来るという端から見ると笑える特技まで持っている。

その他にも違う点は多々あるのだが、総評でオオカミに似ているということにしている。

今のジローは大型犬サイズで、二本の尾が忙しなく揺れている。屈んだジローに跨ると、ジローはゆっくりと歩き出す。

ジローのフサフサの白い毛といい、ものけ姫になった気分だ。

「姐さん今日の気分はどうですか？」

「うん、上々」

段々駆けていくジローの後を、多くの家来達が一斉に着いてくる。この光景を私が作っているのかと思うと、そりゃあテンションも上がる。

ジローは私がトリップしてくるまでこの山の主だったらしく、頭も利口で言葉も話せる。

何故日本語が通じるのかは謎だが、そこらへんは気にしないことにする。

他に話せるのは数匹いるが、彼らもこの山でトツプクラスの実力らしい。と言ってもこの山というだけで、世界的に見るとれぐらいなのかはここにいる限り分かりようがないのだが。

そしてそんな彼らの頂点に立つ私と言うと、特に何の能力もない。はつきり言って彼らが私に従っている理由が不明だ。

で、何故私がジロー以下含めこの山を統べる女王になっているのかだが、この話は後輩云々まで遡る。

その月は仕事が波のように押し寄せ、そんな中後輩達が立て続けに結婚やら妊娠したやら幸せ臭を撒き散らし、

あぐく一番結婚はないと言われていたさっちゃん（私じゃないもう一人の佐藤さんのあだ名）にまで年上の彼氏が出来るといふ暴挙。そしてトドメは会社の帰りに呼び止められ……

『佐藤さん彼氏出来たらしいですね！　どんな彼なんですかあ？　歳は？　あ、いつ結婚予定ですかあ？　その時は私も呼んでくださいねえ！』

なんていう私じゃない佐藤だと知っていながら、私につつかかってくる後輩の言葉にイライラは頂点に達した。

絶対零度の微笑みを見せるとツカツカと家に帰り、荒々しくドアを閉め、防音室へと入る。

淡々と服を脱ぎながら上下下着姿になると、ふつと息を吐き、そして目一杯吸う。

『ばツツツきやろおおおおおおおおおおお！！！！！！！！！』

人生最大の雄叫びを上げた瞬間、私は身も心もトリップした。驚きの肺活量をしているらしき私はトリップ後も叫び続けたく、気付くとジローが目の前で頭を垂れていた。

「姐さん、一生着いて行きます！！！！」
「ウオオオオオオオオオオ！！！！」

と、いった感じだ。

よくわからないが、その時から私はこの山の女王である。

後から話を聞いてみると、どうもジローが山の主としての雄叫びを上げている最中に、その声に被さるように私と私の声がトリップしたみたいだ。

その時私が声と共に発していた気がどうかこうとか言っていたが、それもあまり理解していない。というか興味がなかったからジローの興奮している声も右から左だった。

「ジロー」

「はい姐さん！」

私がジローの名前を呼ぶと、すぐジローは嬉しそうだ。

「帰ったらマッサージしてね」

「もちろんです！」

うん、いい家来だ。

その後も流れる景色を見ながら（あまり変わらない景色だけど）、山の空気を全身に浴びる。

「キモチー」

ジローの今の速度は、絶叫系が苦手な人にはお勧めできない速さだ。

さらに揺れも当然ながらにあるのだが、それは慣れとジローの毛のフワフワ感が忘れさせる。

寝る時もこのフワフワを存分に活用している。ジローの胴体を枕に、二本の尾を掛布団にして快適な夜を送っている。

私の体内計算で30分が過ぎた頃、ジローが速度を緩める。

「そろそろ戻ります？」

「うん」

そう言うと、ジローがまた吼える。そしてUターンすると、家来達が脇に並び、帰り道を開けていた。

この乗っているだけという作業は簡単そうであれど、

最初の方はよく筋肉痛に悩まされたものだ。あと数回すべり落ちて、ジローが半泣きだったこともあった。

家来の一人が擦りキズを一瞬で治してくれたが。

そんなこんなですっかり慣れた今は、手放しても乗ってられる。

途中川に寄りながら帰って来ると、ジロー以外の家来達は帰って行った。

「姐さん、マッサージ始めますね」

「ありがとうございます」

地べた（と言っても色んな毛皮が引いてあるが）に寝そべると、ジローが器用に背中の中のツボを押し始める。

「ん〜」

その気持ち良さにウトウトし始めた頃、ソレは起こった。

「グルルルル」

突然唸りだしたジローにびっくりして、起き上がる。

「ん？ ジロー？ どしたの？」

「姐さん！ 何かが起きてる！ 離れないで！」

ジローが元のサイズに戻り、私にピッタリ寄り添う。いつの間にか、周りには家来達が集結していた。

そしてしばらくすると、ゴゴゴゴという低い音が地面の揺れと共に鳴り始めた。

「何？　すごい、揺れ……！」

ジローに必死に捕まってその揺れに耐えるが、立ってられない程だった。

「地殻変動かもしれません。数百年に一度起こると言われていますが、まさか今とは！」

数百年に一度！？　どんな確率だよ！　いやでも、トリップした時点でアレか。私つてもしかして奇跡の女？

「ふ、ふふふ」

「姐さん？　大丈夫です？」

「もちろんよ」

揺られながら話すと舌を噛みそうだ。

しかしあまりに長い揺れにイライラして……

「まーだーかあああああああ……！」

と、トリップした時程ではないが、雄叫びを上げると揺れが激しくなった。

ゴッウウウウン……

大きな物体同士がぶつかりあった音が響くと、一番激しい揺れが

起こり、私は気を失った。

「……さん！ 姐さん！！」

「……………んあ？」

何とも間抜けな声で起きた私は、むくつと起き上がる。

「姐さん、大丈夫ですか？」

ジローの心配そうな声を無視して周りを見渡す。

「どうなったの？」

「どうやら、離れていた山と森が衝突したようです」

ああ、地殻変動だね。って

「森って極悪ドラゴンがいるとか言ってた？」

「ええ。でも大丈夫です。姐さんは俺達を守ります」

キラッキラと輝く青の瞳でジローはキメてくれたが、若干不安は残る。

グオオオオオオオオオオ

とそこへ森から物凄い咆哮が響き渡り、今まで崖だった場所にくっついた森の木々がバキバキと倒れて行く。

「オオオウウ！ グルルエア」

なんだが痛そうな声でフラフラと森を破壊してこちらへやって来たのは、恐らく噂のドラゴン。

極悪だか何だか知らないが、今の姿は顔を抑えて悶えているというなんとも可愛い姿だ。しかし体高は首が痛くなるほど高い。

「我が君！ お待ちください！ そちらは敵地です！！」
「グルルル……………ん？」

リザートマンのような獣が叫ぶと、ドラゴンは足を止めて、初めてこちらを見る。漆黒の身体に金色の瞳が綺麗だった。

「どこだ、ここは……………」
「ですから敵地です！ 引き返してください！」

極悪ドラゴン…………とは少し違う印象に感じたが、暴れられたら厄介そうだった。

「ほお…………。先程の揺れはこの者達が起こしたのか？」
「それは違うかと」

そんな相手のやり取りの間に、ジローが前に出て行く。

「ルルルルル」

低く唸りながらジローが進むと、それに合わせて他の家来達も戦闘態勢に入ったようだった。

それを見たドラゴンの家来達もドラゴンの前に出る。このままだと、間違いなく戦闘が始まってしまう！

「待つてジローー!!」

駆け出してジローの前に立ちはだかる。

「姐さん!? 早くどいてください! 危険です!!」

「待つて、大丈夫。あのドラゴンならきつと話がわかるわ。闘うのは失敗してからよ」

「失敗してから!? そんなことしたら姐さんはどうなる!」

「うるさい! あなた達のトップは私でしょう!!!!」

「うつ……しかし」

「いいから!」

なんて会話を続けていたら後ろで低く笑う声がした。

その声に振り向くと、さっきより小さくなり、2メートル程になったドラゴンがいた。

「くくく、面白い娘だな」

「む、娘……」

久しぶりに聞いた。

でもやっぱり話は通じそう。なんでも力で解決すればいいってわけじゃないからね!

とりあえず、友好関係を築く(気はないけど)にはまず名前から。ということで内心びくびくしながらも、しっかりとドラゴンの瞳を見つめて口を開く。

「……名前は？」

「我が名か？ まだない」

「へえ……。じゃあ付けようか？」

それは軽いノリだった。

ネーミングセンスなら任せてくれ。順番的にいくと次はサブローだがどうしようか。

「おまえがか？ いきなりだな。くくくく、よかるう。我が名を呼んでみよ」

周囲がざわつき、ジローが何か言っていたが真剣に名前を考えていた私は、ジローに適当に頷いて聞いていなかった。

「んつと……サブ……いや【シエルファ】で！」

やっぱりサブローはマズイと思いつさに浮かんだ、昔ゲームでお気に入りだった金髪のキャラの名前を叫んだ。

「ふ、よかるう。ではおまえは……」

シエルファで通ったよ！ ていうかそうだ、自己紹介忘れた！

「私は里^{さと}！」

ふふふ、私はフルネームにすると 佐藤^{さとう} 里^{さと}。小中高とあだ名はサトサト。

一度親に文句を言ったことがある。なんで、佐藤の後に、さとなのか。なぜ同じ響きにしてしまったのか。
すると一言。

『いいじゃない。結婚したら名字も変わるわ!』

だと。しかし結婚せぬまま、未だサトサトである。
そう自傷気味に笑っていたら、ドラゴンが言葉を発す。

「……サト。すでに名を持つのか？ それなのに我と？」

不思議そうで少し驚いたような金の瞳が私を映す。どこらへんが不思議なのかこつちが不思議だ。

「……まあいい。たとえ魔界の主が相手であろうと、我は譲らん。
サト、覚悟せよ」

何を言っているのかさっぱりだが、とりあえずオーケーしといた。
逆らわないのが吉だろう。この場は適当に乗り切って明日からは
会わないように普段の場所を移動しよう。

なんて考えは甘かった。

「こちらに來い。我が寢床を紹介しよう」

寢床オ！？ 別に興味ないから！

「い、いや……その、今日はちょっと遠慮して明日でいいかな、
なんて」

「何故遠慮する？」

「ええっと、ほら、いきなりだと悪いし、あの揺れでしょ？ 疲れ
ちゃって……」

「だから我が側で休めばよい」

はいい！！？ 何が悲しくてあなたの側で眠れと！

「ふむ……まあよい。準備も必要であろう。明日にしよう」

何の準備だ。でもこれで見逃してもらえそう。

「ではサト、明日の朝会おう」

そう良い残し、ドラゴン シェルファが森に帰って行くと、倒れた木々が元通りになった。

「姐さん、本当にいいんですか？」

「大丈夫、だから他の場所に避難しよう」

「え？」

「ほら早く！」

この時の私は、ジローの言葉の意味を理解していなかった。

私とジローは広い山を駆け抜け、頂上付近から中間地点まで降りると、見つけた洞窟を新しい寝床とした。

ジローが何か言いたそうにこちらをみているが、ここに来るまでに疲れ、さらに夜になっていたことで眠ってしまった。

「おやすみ、ジロー」

「ウルル……」

そして翌日。

「姐さん！」

「う……ん。ふぁ、おはようジロー」

「姐さん、奴が近づいてますよ！」

「ふえ？」

まだ寝ぼけている思考ははっきりしない。

奴？ 近づいて……

「でえ！？ シェルファの事！？」

「そ、そうです。探し当てたいです。もうすぐ近くまで来てます」

これは面倒な事になった。

……と、思っていたのもシェルフアが姿を見せるまでだった。

人間とは薄情なもので、結局イケメンには弱いのだ。（え？ 私だけ？ いやいや）

洞窟をあっさり見つけたシェルフアは、昨日とは違う姿を見せた。

「どうだ？ サトの姿を真似てみた」

グッジョブ！

こ、これは……今まで面食いなりにそれなりの人と恋愛してきたが、シェルフアの今の姿はそんな人達は足元にも及ばない。

黒髪に金色の瞳。190くらいの身長に切れ目。しかしその目は

どこか甘さを宿して私を見る。

「さあ来い。今日は逃がさんぞ」

見惚れていた私は返事をしなかった。が、シエルファが不意に近づいてくる。

「サトから来ないなら……連れ去るまでだ」

そう言って私を抱き上げる。ってちよちよ恥ずかしい！ お姫様抱っこは恥ずかしい！！ 三十路だから！ もう若くないから！

「ジロー」

助けて、そんな願いを込めて放った言葉にジローは

「どこまでもお供します」

見当違いの言葉を返してくれた。

あの時、ジローや他の家来が何を騒いでいたのか。

そう……

ドラゴンはずがいとなる者が、相手の名を決めるのだと知ったのは、もう少し先の話だ。

そして、私の名前が決まっている。既に相手がいる。と勘違いしているシエルファが、まだ見ぬ相手に秘かに闘志を燃やしていると知ったのも、先の話。

（後書き）

読んでいただきありがとうございました。

なんと初投稿から一年が経過してしまいました。

あの時はまだ高校生で夏休みの暇つぶしにと始めましたが、ここまですごくとは。

これも皆様のおかげです。ありがとうございます。

これからも応援よろしくお願いします

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1807v/>

森の噂の極悪ドラゴンと山にトリップした三十路の私とそんな私の家来達

2011年7月26日11時30分発行